

## 「東京芸術祭ワールドコンペティション 2019」で拝見した6の作品の批評

アダム・ブロンフスキ

「東京芸術祭ワールドコンペティション 2019」の批評家審査員としてご招待をいただき、作品や参加者との出会いにより互恵的な対話ができたと心より深謝しています。2030年代の舞台芸術のために新たな価値観を評価する方法と、優秀な技術でその価値観をどのように表した作品かを、批評家審査員と共に論じました。

### 2030年代の価値観のため

審査員として、2030年代に予見される舞台芸術を評価する標準を筋書きするよう任命されました。この業務のために現在の状況を踏まえなければならないと思います。2030年に予想される不／可能性を一応頭において、まず現状の地理的なものに限らない形でポスト／新植民地の背景と国民国家や資本主義体制を認めなければならないでしょう。国連で提案された「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals-SDGs) で設定された「2030年までに達成すべき17の目標」には、貧困、資源、防災、教育、職業、環境持続、平等関係などが含まれます。「東京芸術祭ワールドコンペティション 2019」においては、作品も含めその人権を守るための価値観を踏まえながら上演されたのでしよう。

近代世紀の流動の中で、人間は自然の操り人形というよりも自然とともに地球を工作する者に徐々になってきたと考えられます。その上に巨大な人工的システムが生み出した結果は、様々な地球上の境界を超越する現在において、地球温暖化や生態系破滅の効果が明確になっていることは否定できません。そのより激しくなる効果と向き合って、これからどのような舞台芸術作品が意味を持つのか？という問いについて考えます。

世界経済の圧力が高まりつつも人間／自然の共同作業が加速している今日において、2030年代に人間そのものの定義、あるいは人間中心的思考は変わって行くのでしょうか。普遍性／個別性という枠組みよりも、自然と融合的に人間を越えた新たな意識を深めていくことが可能になるかもしれません。この世間一般にはほとんど危機感が認識されていない状況で、国境を超越する市民社会は相互に結びつく方法として進んでいけるのでしょうか。政治や歴史の責任を基に舞台感覚や空間を表象した作品、すなわちドグマを超えて垂直的よりも水平的な成熟した対話／創造／造形を通して、2030年代の世界観を作るのは可能なのでしょうか。

### 作品の評価と基準

#### パフォーマンスや舞台装置への期待

- a. フォームや形態
- b. 構造や構成
- c. 客席との関係－通路／印象／変形
- d. 社会と歴史の意識

## 個々の作品について

### ***Possibilities that disappear before a landscape, Spain***

作家や演出チームは人類学的な眼差しに基づいて、痛ましい男性/人間を描く様々な場面から作品を構成しています。スペインの作家サラ・メサ氏の論争を参照しながら、地球温暖化というのは自然から人間への復讐だというテーマに基づいたパフォーマンスだと思いました。次の場面では男の体を非英雄的なイメージで描きフェミニズムの視点を伴っていると感じました。構成や理想への配慮よりも、皮肉を伴って哀れな日常の痛ましさが上手く描写されています。しかし、いくら脚本やイメージがはっきりとしていても、知性偏重の眼差しは、結局のところ今の危機感がどのくらい客席と共有できるのか不確かです。

### ***Mea Culpa, Burkina Faso***

ブルキナファソのワガドゥグ出身のパフォーマーシャルル・ノムウェンデ・ティアドルベオゴ氏が構成、デザイン、出演の *Mea Culpa* は独特な作品でした。フィジカルシアターの技術と様々な装置が使用されており、現地の社会や生活状況を感覚的に体験できました。普段機能している身体が、いつの間にか憑依される媒体として変化していきました。仮面やサンプリングや装置などで想像力を高めながら、グロトフスキーのいう郷愁を伴った精神性や物神性の欲望というよりも、権力（政治や詐欺）に動かされている身体だという気がしました。客席の方へシャルル氏が移動しながら「誰が独立を与えたのか」と語りつつ、相互に反省的な行為により植民地の歴史が現れてきました。振り付けられた動作がたまに遅くなることにより、観客が黙想にふけることが少なくなり更に集中しながら鑑賞できました。

### ***Howling Girls, Australia***

この作品はメルボルンで数年間の実験的パフォーマンスを背景とする「新オペラ」と呼ばれています。前半の頭に、客席の横にある隙間に指揮者の手だけを見せる舞台上、長いポーズにより観客の緊張感が始まります。暗闇になりベッドの上でマイク付きのパフォーマーから無言で呼吸の音だけが長く続きます。スキャナーのような光が迫りかけつつ徐々に彼女の声とテルミンの音声が融合し、振動により観客の耳の表面が震えてきます。先ほどの場面から急に眩しい白色の枠に転換されていきます。声音の響きと眩しい光にオペラ歌手と五人の様々な出自の女の子（毛皮がついていて「悪」あるいは「魔女」の象徴でしょう）が同時に声を上げました。この作品は「9.11」のトラウマをテーマにして、弁証法的な闇と光によって場面が分けられています。ジョナサン・サフラン・フォア氏の小説『ものすごくうるさくて、あり得ないほど近い』を思い出しました。後半に女の子たちを中心にして、スモークが立ち込める白色の枠の裏の地下墓地のようなところで声音を出し続けます。女の子たちの背骨についていた「毛皮」は消えないトラウマが身体に残る象徴ではないでしょうか。背後にあった黒引き幕の隙間にオレンジ色を見たら、レナード・コーヘン氏の「全てのものには隙間があるので光が入ってゆく」という詩の断片を思い出しました。しかしいくら優秀な無言オペラを構成しても、この歴史的に重要な事件をテーマにしたければ、もう少し超越的な他者性を含めないと次の世代は狭い枠組みにとらわれてしまうのでしょうか。

### **Tú Amarás/You shall love, Chile**

この作品のプロローグは16世紀の南米の植民地に設定されました。先住民とスペイン系の植民者との対話で、動物と人間の関係が現れます。動物に恋愛的感情を抱いた先住民が植民者に罰される、「文明化」の歴史が描写された場面から始まりました。次に現代の医師たちの会議。主催者となる医師たちの中に一人の「他者」がいます。彼がうさぎに似ていると笑われた時は観客が同情します。途中で彼の告白により観客は裏切られます。

地球外生命体「アメニタス」にも笑われた彼はタクシー運転手が彼のゲイの兄弟に冗談を言ったとき、最後には気が狂って運転手を殺しました。真実が明らかになった後、医師たちが排除しようとしても彼は残ります。「医師会はみんなが「気まづくなくなる」まで始まらない」という曖昧な正当性は中産階級の一つの症状ではないのでしょうか。暗転の後、役者たちが「チリでは現在人権侵害が起こっている」という垂れ幕を持ち出しました。形と構成としてはあまり斬新な作品ではないのに、ある場面に「動物化」についての説得的なパワーポイントが投影されました。この歴史的瞬間にチリの30-40年間を踏まえながら、意味深長な作品だと思いました。

### **Big Nothing (from the east), China**

戴陳連氏の作品は造形的でとても美しい影絵芝居でした。個人的な夢であって、お祖母さまと魯迅の映像を長い間投影しました。特徴的な時間性を持ち、詩的な沈黙で失われた記憶というテーマをうまく想起させました。霧が立ち込める水路の街に住んだお祖母さまの消えた世界に観客が空想にふけて行きます。消えた世界の記憶を思い出すか、あるいは民主主義を取り戻す不可能性をメランコリーとして上演するのかというアポリアが開きます。物神性をもつ特定の時代を解釈できた上に、集中力や技術に関する知識が深い戴氏が、道具そのものの特異性を引き出しつつ夢中になれる体験を実際にすることができました。物質性と流れに対し、途中割り込まれる音であふれる空間とともに、言葉にならないほどその世界に感動した作品でした。

### **Sokonaizu, Japan**

少しずつ自閉していく二人の姉妹を描く、大阪の実話を基にしたかなり斬新な作品でした。失業と貧困や飢餓などに苦労した姉妹は、だんだん有形資産がなくなる中で現代社会との関係を明らかにしていきます。自治体から生活保護を受けようとすると、彼女たちは実家などの財産を全て売って仕事探しを一生懸命しなければならない状況にあります。新自由主義を基にして男女間の、そして垂直的なヒエラルキーの制御により人々の団結が弱くなっていくことの一つの例です。さらに戯曲の構成は歌や詩の響きと歌い方で、「平家物語」が政権の権力を語るかのように演じました。暗転する前に語られた、現実の世界はこの世界だけであるという結論は印象に残りました。しかしガラパゴス化する世の中を超越するために、外や内に向き合いながら「トランスローカル」の親密な団結を新たに発見する必要があります。

オーストリア国立大学の研究者、任期付き教授。近／現代史と舞台芸術を専門とする。文化政治や理論（ポスト構造主義、ポスト植民地主義など）の影響を踏まえつつ活動。日本の前衛演劇と近／現代史について *Cultural Responses to Occupation in Japan: The Performing Body during and after the Cold War* (London and Sydney: Bloomsbury Academic 2016) 著者。2013-2016年国立研究所の企画として福島第一事件に於ける社会的／文化的応答について論じる。アカデミックな活動以外に数年の舞台芸術活動の背景も持つ（東京の劇団解体社も含む）。

<https://researchers.anu.edu.au/researchers/broinowski-arg>.